

特別講演 5

引揚の記憶と平和の願いを世界へ未来へ

京都府 舞鶴市引揚記念館元館長 山下美晴先生



はじめに——

2015年「舞鶴への生還—1945 - 1956 シベリア抑留等日本人の本国への引き上げの記録」がユネスコ世界記憶遺産(Memory of the World)に登録された。世界的に重要な資料や所蔵する舞鶴引揚記念館の取り組みなどを紹介する。

引揚のまち舞鶴——

京都府北部の日本海に面し、古くから海とともに栄えてきた港まち舞鶴。1901年に海軍鎮守府が置かれ、明治、大正、昭和は軍港として、また第2次世界大戦終結後は、13年間に渡り、海外からの引揚者66万人(内、7割はソ連方面)を迎える引揚港としての役割を果たした。当時の舞鶴市民は戦後の混乱期に自らの生活もままならない中、心身共に疲れ切った引揚者を歓迎の言葉や湯茶のふるまいなどで温かく迎え、多くの体験者からは感謝の言葉が今もなお伝えられている。1988年には、戦後の第1歩を舞鶴で踏みしめた体験者からの熱望で、引揚の史実を後世に伝え平和の尊さを発信する拠点として「舞鶴引揚記念館」が開館し、現在までに1万6千点もの資料が全国から寄贈されている。



薄れゆく記憶を世界の記憶に——

2000年代になり体験者の高齢化も進みピーク時には20万人あった来館者も半減する状況に。引揚の記憶も徐々に薄れつつあるなか、舞鶴引揚記念館の資料をユネスコ世界記憶遺産に登録することを目指した。まちを挙げての取り組みの結果、2015年に世界的な重要性和希少性などが認められ引揚関連資料が“世界の記憶”となりました。登録されたのは、抑留中に必死に書き綴った日記や家族との強い絆をうかがい知ることのできる手紙など570点。過酷な歴史とともに家族愛や人間愛、生命力、平和の尊さなどの人類共通の普遍的な主題を伝える記録資料である。



ラーゲリでの食事の様子

ラーゲリとはロシア語で収容所を意味する。展示の場面は、ラーゲリの中で配給されたわずかな黒パンを中央右の男性が手にしている手作りの天秤で、量りながら切り分けて、全員に均等に配分している。少ない食料をめぐる、仲間同士での争いごとを避けるための知恵であった。



世界へ未来へ——

ユネスコ世界記憶遺産登録の効果もあり、舞鶴引揚記念館の来館者は増加。しかし、世界記憶遺産への登録はゴールではなく、継承への新たなスタートとして、引揚のまちとしての責務を果たすことが大切と考え、歩みを進めている。

国内だけでなく海外での資料の調査事業や類似博物館との交流など。その中でも、特に旧ソ連時代に抑留地であったウズベキスタン共和国とは、シベリア抑留関連の博物館との相互訪問をきっかけに、東京オリンピックのホストタウンとなり、スポーツだけでなく様々な交流に繋がっている。

岸壁の母、岸壁の妻

引揚船がつくたびに、平棧橋や五条棧橋にたたずみ、はるかシベリアの空を仰ぎ、消息不明の子や、夫のかえりを待つ婦人の姿が見られ、市民から、誰言うとなく“岸壁の母”“岸壁の妻”という言葉がひろまり、その切々たる姿は、人々の涙をさそいました。こうした情景を歌った「岸壁の母」のレコードは、人々の共感呼び、全国の隅々まで広まりました。



また、大切に取り組んでいるのは、次世代への継承である。舞鶴市では、市内の小学6年生全員が引揚について学んでおり、そのほかの学年についても遠足や校外学習などで引揚記念館を訪れる機会をつくっている

そういった積み重ねの中で、舞鶴引揚記念館で語り継ぎを担う大人に交じって、5年ほど前から中高生が、自主的に参加するようになった。現在では中学2年生から大学生までの30人が「学生語り部」として活動しており、館内での案内のほか「難しい歴史を自分たちの言葉で、同世代や年下の子たちに伝えていきたい」の思いで全国からの修学旅行生などとも交流している。舞鶴では、今後も「次世代への継承」から「次世代による継承」を目指しながら、平和の尊さをこれからも語り継いでいきたい



白樺日誌

シベリア抑留中に、紙の代わりに白樺の皮を使用し、空き缶を加工したペンで煤を水に溶かしてインクにして、日々の想いを和歌にしたためたもの。およそ200首もの和歌で構成され、家族や故郷への想いのほかに、抑留生活中のことが表現豊かに綴られている。たびたびあった収容所での所持品検査をはじめ出港地のナホトカや舞鶴での所持品検査をくぐり抜け奇跡的に没収を免れた。作者は舞鶴市出身の瀬野修氏(1908~1995年)。樺太で終戦を迎え、その後シベリアへ連行され2年間の抑留生活を送った。

【略歴】

1986年舞鶴市役所入庁。2012年から舞鶴引揚記念館館長。
2022年から舞鶴市産業振興部長兼舞鶴引揚記念館顧問